

みんなのデジタルリポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

水の器：循環する水と生活文化

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-02-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 久保, 正敏 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4608

第十章 水の器——循環する水と生活文化

久保正敏

器から水の文化を考える

水は、地球上すべての生命現象を支える最も根元的な物質である。地球上には、海や河川など液体だけでなく、氷河や雲の固体、水蒸気の気体と、さまざまな形で水が存在する。摂氏温度の定義が、当初は水の三相に基づいて決められたことも、水が如何に人にとって基本的物質であるかを物語る。水は、雲、地下水、氷河や氷山、河川や湖沼、海など、地球規模で見た水の循環系における自然の器や、水田、棚田、溜池やダム、井戸や水路など人工的な器を経て、最終的には最も身近な道具である器を介して人に利用される。

しかし水は、地球上あまねく豊富に存在しているわけではない。水そのものを、あるいは何らかの処理なしに利用できる水を手に入れることが難しい地域も多い。こうした水の偏在が、近年大きな議論となっている「水の危機」、すなわち、水の欠乏と汚染の問題の根源の一つであろう。水の危機という文脈における議論には、自然科学的な知見に基づいて、健康や環境などの行政的な視点で水を考えるものが多い。しかし、水の利用を捉えるには、文化・社会的な視点での考察を忘れてはなるまい。というのは、これまで人間は、水に対する文化的な文脈で水を利用してきたのであり、それは必ずしも自然科学

的な水の属性と相容れない場合もあるからだ。こうした文化的な文脈で水のとらえ方や水の利用を考えるうえで、「水の器」は切り口の一つとして有効ではないだろうか。水そのものの属性だけでなく、器を介することで、水はさまざまな文化的・社会的な意味をもつからである。時には、中味の水の物理的・化学的特性とは関りなく、器そのもののシンボル作用によって、中味の水が清浄とみなされる場合さえある。また、器が本来の用途から離れて別の目的に用いられたり、器への装飾や扱い方が、その地域の文化を表象する場合もある。

水そのものに対しても、人は水の特性に合わせてさまざまなイメージを重ね合わせてきた。無味無臭・無色という特性に対しては、清浄・純粹・淡白・中性などのシンボルを充て、液体としての流動性には無常を、また波動や洪水など大規模な流動には凶暴性を充ててきた。また、物質を溶かす溶媒としての水の特性は、生命や地球環境を形成する物質循環の源であり、さまざまな化学現象を介して産業に関わるほか、身近なところでは茶、乳、酒などさまざまな飲料物を人間にもたますが、不純・不潔と感ぜられる物質を溶解した水は、一転して穢れのシンボルともなる。

民博標本資料データベースに見る水の器

常温の生活場面で水を扱うには、道具が必要だ。国立民族学博物館（民博）には、諸民族の生活文化に関わる身近な道具類Ⅱモノ（民博では標本資料と呼んでいる）が約二十六万点收藏されており、その属性情報がデータベース化されている。水だけではなく、酒など水溶物の保持具や処理具まで拡張してこのデータベースから「器」を検索してみると、約五〇〇〇〇点に達する。それらを通覧してみると、水どのようにに利用し、思いを寄せてきたかが垣間見える。本稿では、茶、酒、乳など水に溶解させた液体まで広げることはせず、主に、水を扱う器に限定することとする。

まず試みに、標本名として登録されている道具名に「水」を含む資料を検索してみよう。その中から動詞を抜き出すと、「灌水、汲む、運ぶ、揚げる、貯める、すくう、飲む、指す、注ぐ、次ぐ、垂らす、売る、漉す、切る、供える」などが挙がってくる。これらは水を目的語とするものだが、「洗う、清める、遊ぶ、火を消す」など、用途としての水を表現するものもある。人にとって根源的である「飲む」ために直接口につける器を終端として、水源から集める、貯蔵する、運搬する、中間的に貯蔵する、さらに、加熱や冷却する、という過程が、サイクリックに繰り返され、それぞれの過程でそれに適した器がある。あるいは同じ器が再度用いられるという水の利用場面が、モノの名前から見えてくる。

こうした飲用としての水の器だけではなく、生活のさまざまな場面でも器が使われる。たとえば、天理参考館の吉田裕彦は、次のように分類している。（一）農牧や灌漑、漁撈などの生業に使う器（じょうろ、水桶、灌漑用ポンプ、たらい、あか汲みなど）、（二）調理のために食材を洗う、煮る、蒸すための器、（三）

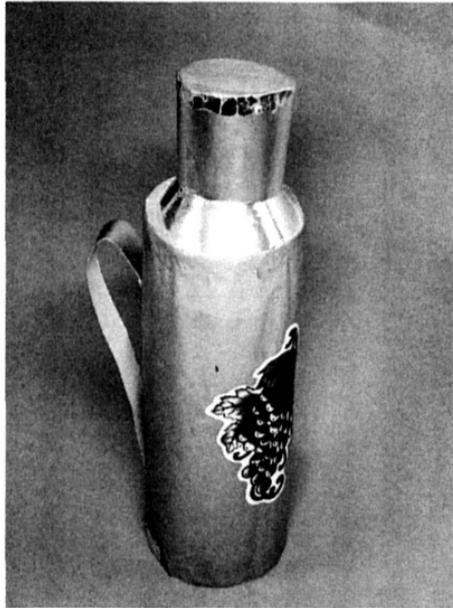


写真1 死者を弔うさいに燃やす紙銭としての紙製水筒。マレーシア・マラッカ州、1994年収集。高さ34.2cm。

と対になる火を消すための器（防火水槽、バケツなど）、そして、（九）儀礼の世界において「供える」「清める」といった水のシンボル作用と結びついた器（聖水や神水入れ、聖水・神水差し）は、その中に聖水・浄水が貯められることを前提とする器である。シンボル作用として面白いのは、洗浄や清めに使われた水は既に清浄ではなく汚水と見なされ、それを受ける器（水受け）もまた存在し、別の用途に水が再利用されることがあるが、これは、その地域で水が豊富か否かにも深く関わっているようだ。

そのほかに、ヴァーチアルな用途として興味深いものに紙製の水筒がある（写真1）。マレーシア・

衛生のため「洗う」さいに用いる器（洗面器、水浴・沐浴用のさまざまな器）、（四）水を介して何かを觀賞するための器（金魚鉢や花瓶など）、（五）水を介した嗜好としての器（茶道具の椀や建水、書道用具の水滴、水パイプなど）、（六）水を介して何かを製造するさいの器（紙漉用の水槽など。ただし、水を切ったり脱水するための簀の子や籠は水を貯める器とは見なさないでおく）、（七）水そのものを遊ぶ器（水鉄砲や水笛、水琴窟など）、（八）水

マラッカ州の中国系の人びとが供物用の紙銭の一種として正月などの祭礼のさいに焼き、別世界の人びとに送り出すもので、こうしたヴァーチャルな用途の道具も、文化の奥深さを物語っている。

器の形態を表す用語について見ると、柄杓、杓子、椀、カップ、コップ、壺、甕、樽、筒、鉢、皿、やかん、水差し、水すくい、水入れ、容器、など、用途を指す言葉も含め、モノの形を表すさまざまな用語が使われている。

材料・材質に関しても、植物素材を用いた、ひょうたん、椰子の実、樹皮を組んだもの、竹筒のまま、あるいは竹を編んで漆や樹脂を塗り保水性を与えたもの、土器・陶磁器・金属加工品、ガラス製品、さらにはプラスチックの工業製品まで、その加工技術や形も含めバリエーションに富み、それらは各地域の自然環境・文化・技術を映し出している。まさに道具とは、人間と環境をつなぐメディアであり、文化を「もの語る」のだ。

器の始まり

喉の渇きを覚えた時、眼前に清水があれば、私たちはつい両手を合わせて水を掬すくおうとする。「掬」という字は、「勺（包構え）」＋「米」の「勑」に手偏を加え、手の平を丸めて米（や水）を包むように



写真2 オーストラリア・アボリジニが最近まで用いていたユーカリ樹皮製水汲み。ノーザンテリトリ、1982年収集。横幅43.2cm。

すくう姿をそのまま表しており、現実のモノだけでなく、心に何かをすくいとって味わう意にも使われる。人は、このように「手の平」という身体を器とする段階の次に、動植物から得られる自然素材に簡単な加工を施した素朴な器を利用するようになったのだろう。

植物起源の器について見れば、温暖・湿潤で適切な植物資源が得られる地域では、樹皮を絞ったり曲げ加工をして器の形にしたり、タケ、ヒョウタン、ヤシなど中空の形状を持つ植物を加工したりして、水の器として用いてきた。土器の発明後もずっと使われ続けてきた、これら植物起源の素朴な容器をいくつか取り上げてみよう。

樹皮製について見ると、パプアニューギニア、インドネシア、マレーシアなどではヤシの葉、オーストラリア・アボリジニの人びとはユーカリの樹皮（写真2）、北米北西海岸地域の人びとはシダー（ヒノキ科）の樹皮（写真3）、中華人民共和国黒竜江省や内蒙古自治区、アイヌの人びとは白樺の樹皮など（写真4）、地域の特性を反映した素材と技術を用い、水汲みや船のあか汲み、椀などを作ってきた。固い樹皮に対しては、蒸気を当てるなど加熱して曲げる技術の発達が見られるのは、北米北西海岸などの北方民に顕著である（久保、一九九四）。

植物の果実は、その果肉を利用した後でも容器として有用である。熱帯アジアからポリネシア、メラ



写真3 シダー製のあか汲み。カナダ・ブリティッシュ・コロンビア州の北西海岸民、1976年収集。奥行26.1cm。



写真4 白樺樹皮製水桶。中華人民共和国黒竜江省でオロチョンが使用、1985年収集。高さ22.1cm。

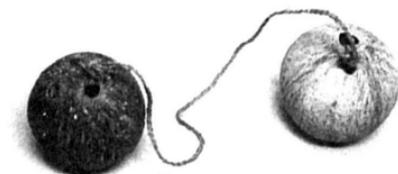


写真5 ココヤシ殻製水入れ。フィジー、1985年収集。直径約11cm。

ネシアなど、その原産地について諸説のあるココヤシは広い地域で栽培され、多様な資源を人間に提供してくれた後も便利な殻を残してくれる。割れた殻は椀となり、柄をつければ柄杓になるので、多くの地域で用いられてきた。オセアニアの島々、パプアニューギニア、フィリピン、インドネシア、スリランカから東南アジア大陸部、中華人民共和国広東省、朝鮮半島、鹿児島県にまで器の分布は及ぶ(写真5)。ウリ科に属するヒョウタンは、原産地がアフリカと考えられる熱帯性の植物で、石灰分が多い土壌や火山灰性土壌が栽培には必須であるとの説もある。ヒョウタンは人類最古の栽培植物の一つと言われ、ヒョウタン栽培は品種改良を伴いながら世界各地に広がった。その訳は、軽くて丈夫なうえに加工しや

すい耐水容器としての需要が多かったからで、土器に先立って世界各地で出土するし、土器を持たない文化では容器としてまことに便利な素材であった。儀礼などの機会や、酒や茶の容器として使われる器には、表面に飾りを彫り込んだり、漆や絵の具を塗ったりする例が、アフリカのサバンナ地域や、グアテマラ、メキシコ、ブラジル、ビルマなどに見られる。古代中国では中空のヒョウタンの中に異界があるときれたし、また一方で、ヒョウタンは優れた水の容器でもあることから、アフリカはじめ多くの地域で水のシンボルともみなされてきたようだ（湯浅、一九八八）。民博所蔵の標本資料約二十六万点の中



写真6 水入れひょうたん。パプアニューギニア、1974年収集。長さ60.5cm。



写真7 水入れひょうたん。ラオス・チャンパーサック県、1991年収集。長さ39.2cm。



写真8 ひょうたん容器。カメルーン・フルベ族、1976年収集。高さ11.2cm。



写真9 ひょうたん柄杓。インド・ビハール州、1964年収集。長さ34.1cm。



写真10 バオバブの実製の栓付き水筒。ナミビア・ウインドフォック、1996年収集、あまり作られていない。長さ18.2cm。



写真11 竹筒水入れ。台湾省花蓮県、アミ族か、1977年受入。長さ99.0cm。

では、熱帯地域のみならず、世界中のほとんどの地域から収集されており、楽器や一般容器、飾り物などその数は一七〇〇点、そのうち、水に関わる器は約四〇〇点に上る（写真6、写真7、写真8、写真9）。なかでも、カメルーンの五一〇点、エチオピアの五十点余り、ケニアの三十点余りなど、アフリカのサバンナ地域の研究者が収集した資料が多いが、これは、その地域での液体の保存と運搬に最も良く用いられているのがヒョウタンであることの証である（和田、一九七九）。

また、植物の果実を用いるものの変わり種としては、バオバブの実を水筒として用いるナミビア共和



写真12 竹筒で水を運ぶモンの人びと。ラオス、1958年読売映画社製作「民族の河メコン」より。

国ウインドフォックの事例がある（写真10）。

タケは、世界中で約八十八属一五〇〇種も確認されているが、種の多さから見ると、アジア・モンsoon地域と南アメリカに分布の中心があり、アフリカ中央部にやや少ないという分布をなし、染色体の進化から見て南アメリカ・ブラジル東南部が起源とされる（柏木、二〇〇九）。温暖湿潤な環境に育つ植物なので、自生の北限は北緯五十一度のサハリン、南限は南緯四十七度のチリとされるものの、赤道を中心とする南北の緯度三十五度までに最も多く自生する。そのうちでも、世界の竹林面積の約八割は東南アジアとインドの熱帯バンブー類が占め、とくに、高さ三十メートル、稈の直径三十センチにもなるゾウタケは世界最大のタケ類で、巨大なわりには稈壁が薄いので容器として重宝されてきた（写真11）。東南アジア大陸部のアカ、タイ、モンなど山間部に住む人びとは、竹籠に竹筒を入れたり、節二つ分の長い竹筒容器に紐を付けてリユックサククのように背負って谷に下り、水を汲んでは村まで運び上げるのを日課としていた様子が、一九五七—一九五八年の「東南アジア稲作民族文化総合調査団」や一九六九年—一九七四年の「上智大学西北タイ歴史・文化調査団」など、学術調査隊の映像や写真に数多く記録されており（写真12）、現在でもその姿が見られる。



写真13 水汲み用天秤籠。竹編製で外側に樹脂を使用。ラオス・チャンパーサク県、1991年収集。直径約27cm。



写真14 蓋付き水入れ容器。木の根製。ケニア・マルサビット県、1985年収集、あまり作られていない。最大長63.2cm。

民博標本資料データベースを見ても、水汲みや水入れとして、ブータン、インド、ラオス、タイ、マレーシア、台湾、フィリピン、インドネシアなどの資料が収集されている。先述の通り、タイ・ラオスでは、竹を編んで漆や樹脂を塗り保水性を与えたものも多い（写真13）。

日本のタケはずっと小振りだが、やはり水容器として古来から重宝され、室町頃までは単に「筒」と呼ばれ、やがてそれが水筒の語源と原型になったようだ。筒という漢字自体が竹の茎の部分を表す表意文字である。

タケの利用については、その円筒形状を利用して、水を運ぶ水道管としての利用も良く見られる。と

くに、東南アジア山地では、山の湧き水を集落の水場まで引いてくる樋として格好の材料である。そうした風景には、現在でもタイ・ラオスの山地でよく出くわす。

植物製の器のなかには、木の根を編んで籠様の容器を作る例もあり、民博所蔵のケニアの資料は、ラクダの背に付けて運搬に用いられるが、その通気性の良さによって、気化熱による水の冷却効果が得られるもので、人びとの知恵を映している（写真14）。

木製の器も、椀状のものが日本、ロシア・プリアート、大韓民国、中国、モンゴル自治区、ネパール、チベット、ブータン、ケニア、アメリカ中央高原の先住民、などから収集されており、塗りを施したものも多い。壺状のものがアルメニア、杓子状のものがオーストリア、インド、ネパール、イラン、シベリア、インドネシア、エクアドル、ノルウエーやスウェーデンのサーミの人びと、オランダ、モロッコなど各地に広く見られ、加工の容易な樹種の存在と木工技術の発達のある地域を示している。

動物起源の素材を用いる器について見ると、狩猟や牧畜地域では、動物の胃袋や膀胱などの内蔵や皮で作った袋の利用が多く、とくに植物資源の乏しい乾燥地域ではその傾向が強い。トルコやイラク、イランに見られる羊皮を縫い合わせた水筒は、ラクダ遊牧民の間でも良く用いられている（写真15）。インドの井戸の水汲み容器や水運搬用皮袋、ナミビアやボツワナに済むサンの人びとの用いるキリン胃袋製の狩猟用水筒、なども見られる。他方、アフリカ南部カラハリ砂漠に暮らすサンの人びとはダチョウの卵の殻を水筒とする事例があり（池谷、二〇〇七）、同様の事例はスーダンのナリムの人びとも見ら



写真15 羊皮製水筒。イラク・ハムリン山脈北、1981年収集。長さ86.7cm。

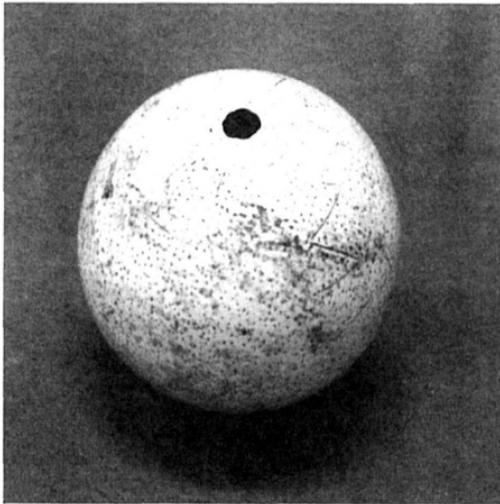


写真16 ダチョウの卵製水入れ。ナミビア、1980年収集。直径約10cm。

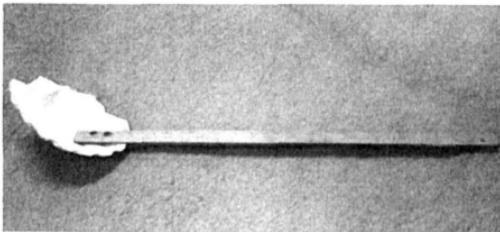


写真17 貝製杓子。愛知県、1930年収集。長さ28.5cm。

れる（写真16）。北方地域では、ロシア・サハリンのギリヤークの人びとやカナダ・イヌイットの人びとがアザラシの胃袋を用いて油入れにも用いる容器を作っていた。水だけではなく、乳製品にまで広げれば牛や羊の胃袋を用いる乳加工用具、酒に広げれば牛の角や象牙を用いる角杯などの事例は数多いが、ここでは水の器に限定して深入りはしない。また、膀胱を使った器や袋の事例は、民博所蔵の資料には見あたらなかった。いづれにしろ、動物起源の軽くて耐水性があり割れない袋類は、乾燥地域の移動の

さいに水の携行用容器として安全確実なものであったと言えよう。

また、柄杓様の器にも眼を広げると、貝殻の腕状部分を活かし木製の棒を取り付ける例は、日本各地やアイヌ、台湾にも事例がある（写真17）。

土器から金属製の器へ

土器作りの起源は一万八〇〇〇年前の中国湖南省にさかのぼるといふニュースが最近報じられた（讀賣新聞二〇〇九年六月四日付朝刊）。土器作りは「人類が物質の化学的变化を利用した最初の出来事」であり、器として見れば、動植物素材利用の次の段階と考えられる。土器製の器、とくに水甕は、調理の場でも活躍し、火と水を扱う台所には欠かせない道具となった（石毛、二〇〇〇）。民博所蔵の資料としては、台湾、インド、スリランカ、タイ、インドネシア、フィリピン、フィジー、などの南アジア・東南アジア、ペルー、メキシコ、コロンビア、コスタリカ、エクアドル、ジャマイカなどの中南米、エジプト、モロッコ、マラウイ、カメルーン、スーダンなどのアフリカ地域から収集されている。これら資料の多くは考古遺物や古い資料であり、彩色して置物としても併用されている例を除けば、現在では実用されている事例は少なくなっている。ただし、今でも、熱帯地域のメキシコやジャマイカ、エジプト



写真18 飲料水用冷却壺。モロッコ・マラケシュ市、1989年収集、あまり作られていない。高さ55.7cm。



写真19 水冷し用水差し。土器、ジャマイカ、1987年収集、あまり作られていない。高さ23.7cm。

やモロッコなどでは、素焼きの特性を活かし、表面にしみ出た水の気化熱の効果を利用して貯めた水を冷たく保つために土器の壺などがよく使われているのは、興味深い事例である（写真18、写真19）。

また、土器の器の使用が不浄観とも関わるのが、インドの事例で見える。カースト制の下では、唾液を介する不浄の伝達が忌避され、そのために、ヒンドゥー教徒は使い捨ての素焼き器を多く用いてきたとされ、それが、インドで陶磁器が発達しなかつた理由の一つとされる（小西、一九九一）。

もつとも、陶磁器製のもものは、メキシコや沖縄での収集資料があるほかには、民博所蔵の資料にはあまり見られない。

金属製のものとしては、銅製または真鍮製の水入れ、水差し、壺、湯沸かしなどが、チェコスロバキア、ブルガリア、エジプト、トルコ、イラン、ウズベキスタン、アフガニスタン、ネパール、チベット、ブータン、インド、中国、メキシコ、ペルーから収集されている。とくに、中央アジアから西アジアでは、同地域に特徴的なサモワールと呼ばれる湯沸かしのように、湯沸かしと兼用のものや、水差しの形状のものが多い(写真20)。これらは、古くから銅鉱山が開発されて金属工芸技術が発達したこの地域の特性を反映しており、金属の乏しい色彩感を補うためか表面にメッキ(鍍金)、彫金、象嵌、ニエロなどの装飾が施されたものも多い(杉村、一九八三)。また、水差しは、脂っこい食材を手づかみするこ



写真20 サモワール、トルコ・イスタンブール、1975年収集。高さ63.9cm、重さ8167g。



写真21 アトレ(Atole、トウモロコシの粥)を飲むための儀礼用碗。蔓ヒョウタン製、グアテマラ、1987年収集。高さ13.1cm。



写真22 儀礼用土器壺。コスタリカ、900-1200年頃使われた、1980年受入。高さ28.9cm。

の地域の食事やイスラームの礼拝のさいに、手洗い用にも用いられるが、この場合、水差しという形状は、必ずしも潤沢ではない水を用いるのに適しているのである。他方、ネパール、チベット、ブータン、インドの銅製器は、次に述べるように聖水と関わる器が多い。

聖水に関わる器

先に触れたように、儀礼のさいに液体を供えたり、飲んだりするための容器は数多い。たとえば、フィジー、トンガ、西サモアでカバ酒作り用、カバ飲用に使う木製あるいはココヤシ殻製の鉢や器、フィリピン・イフガオ族が儀礼のさいに米酒を飲む木製杯、グアテマラで儀礼のさいにアトレと呼ばれるトウモロコシの粥や酒、チョコレート飲むヒョウタン

製の椀（写真21）、などのほかに、中米やメキシコからの考古遺物にも土器製の儀礼用器が見られる（写真22）。しかし、これらは水の器からは除外して考え、聖水に関わるものをいくつか見てみよう。

聖水を神や仏に献上する、聖水を人に配る、人がそれを飲用して加持を得る、清めのために聖水を人や事物に振りかける、道具類を清めるなど、祭式の作法や段階に応じて聖水の利用場面が異なり、それぞれに適した形状の器が発展してきたようだ。少量の水で事足りるとされていることも、これら器類の特徴の一つである。少量の聖水を注ぐ水差し状のもの、それを受けて神や仏の祭壇に献げるための杯状あるいは皿状の器、あるいは水差しから受けた聖水を清めのために人や事物に振りかけるスプーン状のものなどが見られる。また、儀礼用具が一式に組み合わされ、その一部に聖水に関わる器が組み込まれている例も多い。こうした儀礼上の作法はまた、水が水そのものか、あるいは血を表象するのか、といった、それぞれの宗教上のシンボリズムとも関わっている。

ブータン、チベットのチベット仏教や、ネパールのネワール仏教の信徒が用いる、水差し、そこから注がれた聖水を仏前に供える供杯くはい、インドのヒンドゥー教徒の用いる水差し、供えるための容器、などは、いずれも真鍮又は銅製が多い（写真23、写真24、写真25）。ネワール仏教はカースト制度と組み合わせられており、金細工の職能集団がこうした儀礼用器の制作に関わっている（写真26、写真27）。ヒンドゥー教の基本となったヴェーダ祭式では、木製の聖水入れが用いられ、ソーマと呼ばれる植物抽出液の献供と聖職者が飲用するさいに用いられたが、現在では、米や麦と混ぜた聖水を献供したり、祭式に用いる



クハ
写真24 供杯。銅製、チベット・ラサ。
仏教儀礼の祭壇下に置かれる。1900
年頃収集。直径約8cm。



写真23 儀礼用水差し。真鍮製。チ
ベット・ラサ。儀式のときに写真24
の供物用杯にそそいで仏前に捧げる。
1900年頃収集。高さ30.2cm。



写真26 ネワール祭具(聖水器)。真
鍮製、ネパール・パタン市、1981年取
集。高さ9.0cm。



写真27 ネワール祭具(聖水器)。銅製、
聖水を清めのために振りかけるさいに
用いる。ネパール・パタン市、1981年
収集。長さ11.0cm。



写真25 金属製聖水入れ。聖水を行
者に配るもの、ブータン、1984年収集。
羽根まで入れた高さ44.2cm、本体の
直径約9.7cm。

道具を清める聖水を入れるなど、祭式によつてさまざまな用途に変化しているようだ（写真28）。そのほかに、タイ仏教徒が用いる銀製の壺、ロシア・ブリヤートの儀礼用真鍮製水差しや椀、なども民博所蔵の資料に見られる。民博所蔵資料にはないが、後述する「原野農芸博物館資料」によれば、ピルマ族やラオ族が祖先棚に供える水差しには男女型があつて一対で使用する例もある（写真29）。総じて聖水に関わる器に真鍮など金属製が多いのは、耐久性や制作集団の存在、などの理由のほかに、金属と浄性観との関わりがあるかも知れない。

こうした聖水は、しかるべき水場からしかるべき聖職者が集めたことを前提とはするが、中味の水は

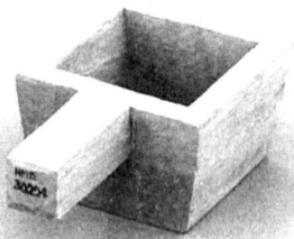


写真28 木製祭具。ソーマ祭の主要供物ソーマ液の献供と各祭官の飲用に用いられる容器。インド・ケララ州、1975年収集、あまり作られていない。長さ20.2cm。

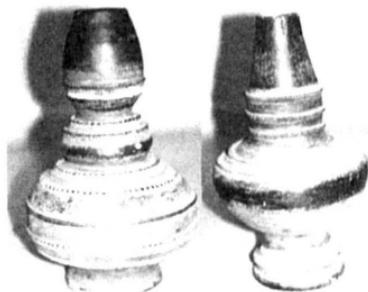


写真29 祖先棚に供える水差し。左が女性型、右が男性型。ラオス・ルアンパバーン、1995年、原野農芸博物館・第1次ラオス調査にて収集。左の高さ27cm、右の高さ26cm。



写真30 フランス・ルルド (Lourdes) で販売されている聖水容器。2007年収集。最大の高さ22cm。

必ずしも衛生的な清浄水と言うわけではない。その器とそれを扱う人が浄というシンボル作用を成し、浄観を形成するのである。これが、聖水に関わる器の特性であろう。このシンボリズムは、山口昌伴の指摘するような、汚れと穢れの観念上の差異とも（山口、二〇〇六）、逆の照応をなすはずである。

そのほかに、世界各地には、民間伝承などに基づいて奇跡の水を生じる泉、洞窟、井戸がある。メキシコのトラコテ、ドイツのノルデナウ、インドのナダーナなどが知られるが、これらもいわば聖水の名所であつて、聖水を信者が持ち帰るための容器が用意されている例も多い。たとえば、観光地でもあり、マリア信仰と結びついて連日、信者が押し寄せるフランス・ピレネー山脈の麓にあるルルドの泉では、小型ペットボトル状の聖水容器が販売されている（写真30）。

写真データベースに見る水の器の変化

以上、見てきた民博所蔵資料は民博所属の研究者によって収集されてきたものであるが、民博研究者の陣容は全世界をカバーしてはいないこと、道具の主要な材料か部材かによつて材料に関する記述には研究者間で差があること、物質文化を得意としない収集者の記述には材質への目配りが不十分な場合も多いこと、などのために、このデータベースから悉皆的で正確な情報を得ることは難しい。また、す

に三十年を越える収集の歴史や、民博の創設時に、東大理学部人類学教室資料、アチックミュージアムで所蔵されていた資料も引き継いでいるために、既に現在では使われていない資料も数多い。逆にこうした状況を活かし、器の利用の歴史的变化を追うなから、文化や社会・経済状況の変容をたどることができるとも知れない。この点は、物質文化研究を文化・社会研究と接合する一つの方向であろう。もともと、そのためには、モノの制作・利用の背景や文脈を語る写真や映像資料と組み合わせた分析も必要となる。

こうした目的のもとに、我々は、メコン流域という特定の地域に絞って、モノ資料と写真資料の収集とデータベース化も進め、モノ資料と写真資料の統合検索システムI D O M (Integrated Database On Mekong basin)を開発してきた。これは、総合地球環境学研究所の研究プロジェクト「アジア・熱帯モンスーン地域における地域生態史の統合的研究」1945-2005 (代表：秋道智彌)の「モノと情報班」メンバーによって企画され(秋道・久保・田口、二〇〇四)、同プロジェクトおよび人間文化研究機構・連携研究「湿润アジアにおける人と水の統合的研究」の資金を得て開発されたものである。現在のところ、モノ資料として、「原野農芸博物館資料」「天理参考館資料」「黎明館川野資料」の三種が、写真資料としては「上智大学写真真資料」「川野写真真資料」の二種が収められている。

原野農芸博物館は、原野喜一郎が一九五八年に大阪府豊中市に開いた服部農園を一九六四年に服部農業博物館に改修して農具・民具収集を開始し、一九六八年に原野農芸博物館と改名、一九八八年に奄美

大島に移設された博物館である。同博物館三五周年の記念事業として、一九九四年から長男の原野耕三が中心となってアジア山地の少数民族、さらにアジア島嶼部にも対象を広げて生活文化の調査・収集を開始した。「原野農芸博物館資料」は、その過程で収集された資料で、対象地域は、ラオス、ベトナム、タイ、中国、インドネシア、マレーシア、フィリピン、パプアニューギニア、台湾、カンボジア、ミャンマー、ナガランド、と広範にわたり、情報も豊富で使用品が多いことから資料価値も高く、なかでも染織関係資料は第一級のものである（小島、二〇〇四）。データ総数は五八九一件に上る。

「天理参考館資料」は、天理参考館に収蔵されている膨大な資料類のうち、メコン川流域三カ国およびビルマで収集された資料である。国内研究者や天理教関係者による現地での調査・収集によるものほかに収集家からの寄贈資料も数多い（吉田、二〇〇四）。それらのうち、一九八六年までに収集された資料六五八件をデータベース化している。

「黎明館川野資料」と「川野写真資料」は、川野和昭が、鹿児島県歴史資料センター黎明館に勤務するなかで一九九六年から現在に至るまで、最初は私費で開始した、ラオスにおける生業・民具・儀礼調査の過程で収集・撮影された個人蔵のモノ資料および写真資料である。モノ資料のうち五六二件が、写真資料のうち、二〇〇三年、二〇〇四年に撮影されたもの的一部三〇九〇件が、それぞれデータベース化されている。

「上智大学写真資料」は、一九六九年から一九七四年にかけて三回にわたって行われた「上智大学西北



写真31 水筒を背負ったアカの娘。タイ・ドイトゥン、1969年、上智大学西北タイ歴史・文化調査団・比嘉政夫撮影。南山大学人類学博物館蔵。

タイ歴史・文化調査団調査の過程で団員が撮影したタイ、メオ、アカなど西北タイ諸民族の写真（カラー・スライド約一万二五〇〇点、モノクロネガフィルム約一万五〇〇〇点）を中心とする貴重な記録であり、二〇〇三年に南山大学人類学博物館に寄贈され、同所に収蔵されている（木田、二〇〇七）。このうち、七七六四件の写真についてのデータベース化が完了している。

この中で、「上智大学写真資料」と「川野写真資料」からは、地域・民族は必ずしも重ならないものの、東南アジア山地での水の利用場面の三十年間の変化を垣間見ることができている。一九六〇年代から七〇年代初めの西北タイ山地のアカやメオ（モン）・ヤオの人びとは、水の確保が難しい山間で水場から太い竹製の水筒で水を運び上げたり（写真31）、山の湧き水を竹製の樋を水道として用い、村の中心部に置かれた木製貯水槽に導くという状況だった（写真32）。この姿は、三十年の間に、日本の技術・資金援助によるなどの結果、共同の貯水槽が金属製のものに変わり、各家庭での容器がポリタンクやバケツに変



写真 32 メオ村の水場と子供。ラオス・フエサイ、1971年頃、上智大学西北タイ歴史・文化調査団・白鳥芳郎撮影。南山大学人類学博物館蔵。

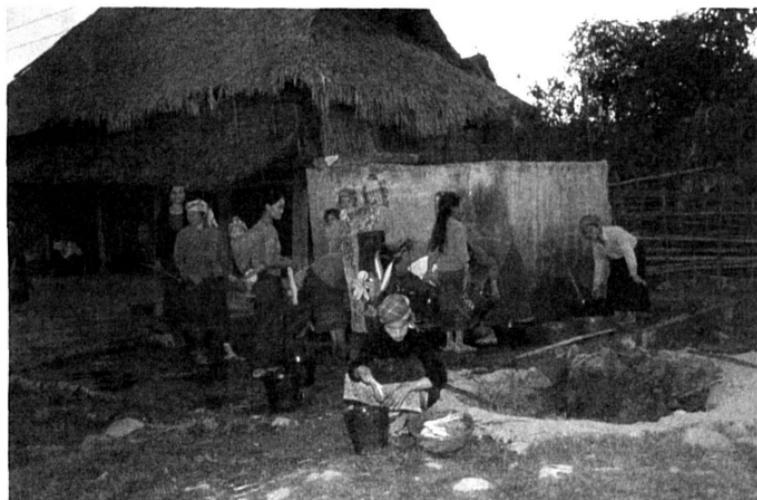


写真 33 水道施設で夕方に水を汲むタイラーの女性たち。ラオス・ボンサーリー県、2004年、川野和昭撮影。

化している様が見える（写真33）。

しかし、村の水場がコミュニティで人の集まる場所であり、洗濯・行水・調理・ブタの解体なども行う共同の場、コミュニケーションの場であることに変化はないようだ。コミュニケーションの語源であるラテン語のコムニス（communis）は、共にある、共に為す、を指す形容詞だが、水がまさにその媒介の一つであり、それを担っているのが水の器であることが分かる。さらにさまざまな写真資料の蓄積と分析により、歴史的变化を追うことができるだろう。

一方、ラオスやカンボジアの都市部などでは、人口の都市集中に伴い、一九六〇年代から各国の資金・技術協力のもとで上水道の整備が進んできたが（たとえば、一九六〇年岩波映画製作所製作「新しい水の恵み…カンボジア王国プノンペン市水道工事の記録」、一九六五年久保田水道瓦斯工業株式会社製作「ピエンチャン市水道工事の記録」などに記録されている）、反面、それに見合った下水道の整備は追いついていないために、地下水の汚染が進んでいる。その結果、コミュニケーションの場でもあった共同井戸や上水道整備当初の共用栓の利用が廃れ、水の利用が個に収斂していく時、器や道具の意味もまた変化していくであろう。

これまでに述べたように、水の偏在とその中で水の利用の様を、各地域の器は表しているようだ。そうした意味も含め、道具とは、環境と文化・社会を媒介するとともに、過去と現在を映す優れたメディアであることが、水の器を通覧することだけでもよく分かる。

【参考文献】

- 秋道智彌・久保正敏・田口理恵、二〇〇四「アジア・熱帯モンスーン地域における生態史のなかのモノと情報——時空間軸をベースとするマルチメディア・生態史アーカイブズの構築を目指して」、『総合地球環境学研究所 研究プロジェクト4-2 二〇〇三年度報告書』二五九—二七九頁、総合地球環境学研究所
- 池谷和信、二〇〇七「水の器・第三回 変わりゆく「水の器」の民族誌」、『連携研究「人と水」 研究連絡誌 人と水』第二号、二四—二五頁、人間文化研究機構
- 石毛直道、二〇〇〇『世界の台所 みんなく発見①』『千里文化財団』
- 柏木治次、二〇〇九「モンスーンアジアの竹と生態」、『天理ギャラリー』第136回展 モンスーンアジアの竹文化—素朴な技術と造形の美—図録』四—六頁、天理ギャラリー
- 木田歩、二〇〇七「上智大学西北タイ歴史・文化調査団コレクション——調査団の研究目的を中心に」、『南山大学人類学博物館紀要』第二五号、五五—七一頁、南山大学人類学博物館
- 久保正敏、一九九四「シダーの木 アメリカ北西海岸地域の木材加工」、『月刊みんなく』一九九四年十二月号、一二—一三頁、千里文化財団
- 久保正敏、二〇〇六a「水の器・第一回 ヴァーチアルな道具」、『連携研究「人と水」 研究連絡誌 人と水』第〇号、一六—一七頁、人間文化研究機構
- 久保正敏、二〇〇六b「水の器 第二回 始まりの器」、『連携研究「人と水」 研究連絡誌 人と水』第一号、二六—二七頁、人間文化研究機構
- 小島摩文、二〇〇四「原野農芸博物館のラオスコレクション」、『総合地球環境学研究所 研究プロジェクト4-2 二〇〇三年度報告書』二一五—二一七頁、総合地球環境学研究所
- 小西正捷、一九九一「インドの民俗造形」、『ヒンドゥー世界の神と人（大インド展図録）』三六—四八頁、関西テレビ放送

杉村棟、一九八三「西アジアの金属器」、『月刊みんぱく』一九八三年二月号、一二一―一三頁、千里文化財団
山口昌伴、二〇〇六『水の道真誌』岩波書店

和田正平、一九七九「サバンナの器」、『月刊みんぱく』一九七九年十二月号、一二一―一三頁、千里文化財団

湯浅浩史、一九八八「ヒョウタンの世界」、『大塚葉報』No.四二三、三二一―三八頁

吉田裕彦、二〇〇四「天理参考館所蔵のラオス標本と天理教ラオス伝道について——一九六五年～一九七八年にラオ

スと関わった邦人宗教家達の足跡」、『総合地球環境学研究所 研究プロジェクト4―2 二〇〇三年度報告書』

三〇六―三一四頁、総合地球環境学研究所